

大分県産キウイが勢いを盛り返しつつあります。

①国東のキウイの販売量が日本一となったのは何年でしょう。

.....

.....

.....

.....

②大分県産キウイが盛り返している“追い風”とは、どんな要因ですか。

.....

.....

.....

.....

③キウイの国内産地を調べてみよう。

.....

.....

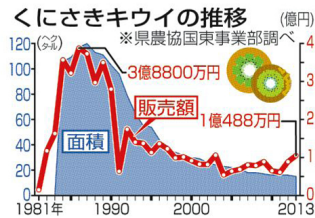
.....

.....



復活させた荒廃園で、たわむれたキウイ。11月上旬、国東市

大分県産キウイが勢いを盛り返しつつある。県内の8割を占める国東産の2013年の販売額は10年ぶりに1億円を突破。全国的に生産が減る中、輸入品の人気に連動して国産の需要が伸びたのが要因だ。かつては日本一の販売量を誇ったが、生産者の高齢化や担い手不足が進んでおり、この「追い風」をどう生かすかが課題となっている。



売上高10年ぶり 1億円を回復

担い手確保が課題

国東産のキウイは、県農協国東事業部が「くにさきキウイ」のブランド名で関東を中心に出荷。1畝当たりの単価は200円台が続いていたが、10年産から4年連続で300円台になった。出荷は秋冬から春が中心のため、外国産（春から秋）が品薄になる時季を埋める。2課は「樹木も古くなる中

維持・拡大に地道に取り組む。「全国的に生産は減少傾向。30年前ほどの勢いはないが、この流れは当面は続くのでは」とみる。県内の産地は他に杵築、臼杵があり、杵築は13年産から、出荷窓口を単価の高国東に統一。県農協園芸部は「これを機に将来を見据えた議論は必要だろう」と話す。単価の安定を受け、県は

2013年産の大分県内のキウイの作付面積は約187ヘクタール、販売量は約350トン。国東では、ピーク時には販売量が約1500トン（1990年）と日本一、販売額は約3億8800万円（86年）だった。各地のキウイフルーツ部会は国東事業部が76人、杵築事業部が12人、臼杵事業部が44人。

県産キウイ盛り返す

める形で需要が増加。市内では、民間企業が栽培（2畝）に参入する動きも出てきた。国東事業部は荒廃園を復活させるなど、作付面積の拡大に地道に取り組む。一方で、独自ルートで京都などに出荷する臼杵は、減産している。本年度、国東市内にある貯蔵庫の空調設備導入を支援した。県園芸振興室は「産地の歴史は長く、キウイの需要は堅い。地域の特産品目として支援したい」としている。